

貉の妖怪物語 第壹回

転生の章

作 自夜

むかあし、むかあし、ある山に名もない貉が棲んでおった

この名無しの貉、この山一番の長生きで、妖怪になって既に何百年もたつとるそうじゃ

山の獣たちは名無しの貉から生きる知恵などを教わっておったが妖怪は妖怪、怖いものは怖い、日頃は名無しの貉に会おうとはせんじやった。狸たちも、まだ妖怪になってない貉たちも山でばったり名無しの貉に会つても知らん顔じゃ

この山には名無しの貉と親しいものはおらん。たまさか訪れるこれまた妖怪の灰色狐と夜を通して酒酌み交わすくらいじゃ

じゃから、名無しの貉はいつも独りで人を襲い、人を化かし、人を困らせて暮らしとった

この日も名無しの貉は幼女を喰らい、腹一杯になったので、道端で休んでおった

そこに、かわいらしいベベを着た五六歳の娘子がめそめそ泣きながら通りがかった

ふむ、美味そうな娘子じゃわい

名無しの貉はそう思ったが、腹一杯じゃったので、知らんふりしちよった

娘子は名無しの貉の前まで来ると、しゃがみ込んでしもつた

しばらくは知らんふりしちよつた名無しの貉じゃが、目の前で辛気くさく泣かれると、せつかくの満腹で幸せな気持ち削がれてしまう。名無しの貉はとうとう我慢できずに娘子に話しかけた

「じら、その娘。わしは人を喰らう貉じゃど。喰われんうちにさっさ

と去れい」

ところが娘子は変わららずに泣き続ける

困ってしまった名無しの貉は娘子を困らせるために、みるみる見てもおどろしい大人道に化け

「去らぬと本気で喰ろうてしまつぞ」

と脅かした。ところが娘子は驚いて逃げるどころか、泣きながらも名無しの貉にこう言つた

「どうか、喰ろうてください」

はて、自ら喰ろうてくれとはどういふことかいなと名無しの貉は思つた

娘子は泣きながらもぼつりぼつりと名無しの貉に語りかける

「とともかかあも戦に巻き込まれて死んでしまいました」

「喰う為に殺すのは悪いことではないと聞きます」

「だったら、喰われるのも悪いことではないと思います」

「どうか、あたしを喰ろうてください」

「あたしを喰ろうて、ととうとかかあのところへ送って下さい」

逃げまどう幼女を追いつめて喰うのは名無しの貉の楽しみじゃが、自ら喰ろうてくれと頼む娘子を喰うのは気がのらんかった

名無しの貉は一刻思案し、行商人に化けて娘子を連れて歩き出した

幾つかの山を越え、幾つかの川を渡って行商人の名無しの貉と娘子はある村に辿り着き、ある百姓屋を訪ねた

その百姓屋の夫婦は一人娘を亡くし、嘆き悲しみながら暮らしておつた。一人娘を喰ろうてしもつたのは、当の名無しの貉じゃつたんじゃがの

「おや、どうさつしやつた」

「旅の途中でこの娘子を拾うての、聞けば親を亡くしたと言つ。そこで一人娘を亡くしたおまえさんがたを思い出しての。どうじゃろう、この娘子を我が子と思うて、育ててくれんか」

夫婦は最初戸惑うた顔しとつたが、娘子を不憫に思つたか、行商人に承知したと答えんしやつた。肩の荷が下りた行商人は礼を述べ道の角を

曲がった途端、元の貉に戻り、自分のねぐらに飛んで帰った

多少は心残りのあった名無しの貉は何かのおりに百姓屋を垣間見、娘が夫婦にかわいがってもろうつる様子を知って安心した

それから幾日か経って、ねぐらでくつろいどる名無しの貉は異様の気配を感じた

「誰じゃ、そこに居るとは」

気配は纏まってねぐらの宙に浮かんだ。人間には見えん気配じゃ。貉にも見えん。名無しの貉は感じとるだけじゃった

「ぬしは幽霊じゃな。この妖怪である貉に何の用じゃ」

名無しの貉の耳にか細い声が聞こえた。聞こえたように感じた

「貉さん、あたしです。貉さんに拾ってもらったあたしです」

「だから誰じゃと聞いとる。何の用じゃ」

「貉さんに百姓屋に連れて行ってもらったあたしです」

「なんや、おんしか。またなして幽霊などやつとる。死にでもしたか」

気配は形を変え、名無しの貉の目にもぼんやりと人の形に見えた

「無理せんでええ、なりたてやろう。何があった。虐められでもしたか」

「いいえ、新しいとともかかあも大層優しくしてくれました。あたしも新しいとともかかあが出来て、大層嬉しく思いました。ところが病

にかかり、死んでしまいました」

「せか、死んじよることは知つとるんやな」

「はい。大層苦しい思いをしました。死ぬと身体が軽くなって、楽にな

つて、こんなことなら早ように死んでおけばと思いました」

「うむ。死んだものはみなそういな」

「ととうとかかあは大層悲しんでくれました。一度も娘を亡くして大層

可哀相なことをしたと思います」

娘子の姿はだいぶはつきりしてきた。目や鼻もぼんやりわかった

「あたしはここにいますよと、何回か声をかけてみましたが、とともか

かかあも気付いてくれませんでした。ああ、もうここに居てはいけない

かかあも気付いてくれませんでした。ああ、もうここに居てはいけない

かかあも気付いてくれませんでした。ああ、もうここに居てはいけない

んだ。そう思い百姓屋を出ました」

「せか、そりや難儀やったな」

「その後は、ふらふらしていました。こつしていれば、いずれ成仏して本当のととうとかかあに会えると思っていきましたが、一向に何もおこりませんでした」

成仏なんてないんやと言いたい名無しの貉じゃったが、言つのをこらえた

「ふらふらしている時におばさん幽霊から貉さんがこの山に居ることを聞きました。だからこつして来てみました」

顔がはつきり判るようになった。涼しい顔だと名無しの貉は思った

「事情は判った。幸いわしは妖怪じゃ。妖怪は幽霊なんぞ気にならん。子供の幽霊は生まれ変わるのも早いっちいう。その気になるまでここに居ってくれてええ」

「ありがとう」

娘子はそう言うて、頭を下げると姿を消した。霧が晴れるように姿を消した

それからも、名無しの貉は独りで人を襲い、人を化かし、人を困らせて暮らした

ねぐらに帰ると娘子の気配を感じた

ある日、ふと、その気配が消えた

「そうか、生まれ変わったんか。今度もええ親のおる家に生まれるとええのお」

名無しの貉はそう思った。そして、また人を襲い、人を化かし、人を困らせる暮らしをつづけ、幾度かの季節が過ぎた

莫迦な人間共はあっちで戦、こっちで戦を繰り返し、名無しの貉もいつしか娘子のことは忘れた

ある日、たまさか訪れてきた灰色狐と酒酌み交わしとると、狐が急にまじめな顔をしてこつ言つた

「何か居ますね」

名無しの貉も気付いておった

「あたしゃねえ、この世のもんでないものが苦手なんでございますよ」
そう言つと灰色狐はそそくさと帰っていった

名無しの貉は宙を見据え、こう言った

「ぬしはまた死によつたか」

「はい。ご迷惑でしたでしょうか」

「気にせんでええ。狐はんは半分神さんやからな、神さんは穢れが苦手なんや」

「あたしは穢れでしょうか」

「神さんにとつてはな。むしろ正真正銘の妖怪にとつてはどうつてこたあない。で、今度はどがいした」

娘子の幽霊はまたぼんやりと形をつくる

「はい。裕福な家に生まれて幸せな暮らしをしていましたが、一家そろつて焼き殺されてしまいました」

「そりやまた豪快やのう」

「はい。百姓一揆とかで町が襲われ、倉が破られ家に火を点けられました。とつとつかかあと幼い弟と抱き合つたまま蒸し焼きにされてしまいました」

娘子の形ははつきりしてきた。多少目鼻立ちは違つけど、年嵩は前のときと同じくらいだなと名無しの貉は思った

「目の前で、とつこの顔が崩れ、かかあの顔が崩れ、弟はあたしにしつかりしがみついたまま炭になっていきました。こうして私だけ生き長らえることができました」

「まあ、生きてはおらんがの」

「とつとかかかあと弟は消えてしまいました。成仏したのでしょうか。なぜあたしだけ置いていかれたのでしょうか。あたしはいつまでたつてもとつとかかかあと弟と、そして本当のとつとかかかあには会えないのでしょうか」

何百年も生きとる名無しの猪は死ねば全て消えてしまふことを知つとる。希に幽霊になることもあるが、いずれ消えてしまふことを知つとる。じゃが、娘子にそのことを言う気には名無しの猪はなれんかった。「さあな。わしは死んだことないけ、判らん。まあええ。また気が済むまでここに居つたらええ」

「ありがとう」

娘子は頭を下げると姿を消した

それから、名無しの猪は独りで人を襲い、人を化かし、人を困らせて暮らした

そしてある日、また娘子の気配が消えた

「今度は少しは長生きできるとええのお」

名無しの猪は娘子が居た宙を見つめ、そう言った

また何年か過ぎた。人間共の莫迦さかげんは相変わらずじゃった

この日も名無しの猪は幼女を喰らい、腹一杯になったので、道端で休んでおつた

そこに半ば破れた鎧を着て、肩に矢がささつたまま杖をついた侍が通りかかった

なんじゃ、侍か。肉も固くて不味そうじゃな

名無しの猪はそう思ったが、腹一杯じゃつたので、知らんふりしちよつた

侍は名無しの猪の前まで来ると、がっくりと膝をついてしもつた

しばらくは知らんふりしちよつた名無しの猪じゃが、目の前で野垂れ死にされると、せつかくの満腹で幸せな気持ち削がれてしまふ。名無しの猪はとうとう我慢できずに侍に話しかけた

「ごら、その侍。わしの前でへたり込むな。ぶち殺されんうちにさつさと去れい」

侍はゆっくりと虚ろな目を名無しの猪に向けた

「も、物の怪か」

「そうじゃ。妖怪の中の妖怪、貉様じゃ」

「物の怪よ」

「貉様と呼べい」

「物の怪は命と引き替えに頼みを聞いてくれると聞いたが、誠か」

「そりゃ、南蛮の妖怪の話じゃ。わしは命なぞもろつても何にもならん」

「物の怪よ、拙者の命と引き替えに、我が恨み晴らしてくれぬか」

「めんどろな事になつたと名無しの貉は思うたが、見ると侍の怪我は死ぬほどのものではない」

「恨みがあるならおのれで晴らせ、頼るな」

「拙者、鹿州手町家の家臣、臼井 亜玉と申す。出城の守備を殿から仰せつかつて居つたが、盟を結んだはずの馬州下山家の軍勢に襲われ出城を奪われた」

「城を取つたり取られたりが侍の稼業やろ、そんなもんで恨むな」

「手勢が少なすぎた。負け戦は仕方ない。だが、奴らは姫を人質にとつた。以前より間者が入り込んでいたらしい。己の迂闊は認める。だが姫を人質に取るような卑怯は許せぬ」

「だまされたんやな。そりゃ、たしかに卑劣や」

「刃向かうことも出来ず、次々に倒された。何とか逃げ延びたものの、城は奪われ、姫は奪われ殿に顔向けできぬ。この先、生きても詮無し。しからは物の怪よ、我が命好きにするがいい。その代わり、どうか我が恨みを晴らしてくれ」

「どうしてわしの所には死にたい人間ばかりくるのじゃろ。名無しの物の怪は嘆いた」

「臼井とやら、ぬしの怪我は死ぬほどやない。命をもらう趣味もない。やが、今少し暴れたい気分ではある。ぬしの復習に手を貸してやるつか」

「まことでござるか、狸殿」

その場でぶち殺したくなつた名無しの貉じゃが、なんとかこらえた下山家は大きなところで沢山の軍勢がいる。姫はおそらく下山家の本城に囚われていて、近づくこともできんという話じゃ

「まあ、わしに任せい。それでも妖かしの術を心得とる」

大切な薬草を名無しの狼は侍の疵につけてやった。侍は元氣を取り戻した

名無しの狼は今度は別の薬草を口に含み、ふんと氣力を高めた。名無しの狼の身体はみるみる大きくなり、馬のような獣になった。身体のうちこちらから妖氣が湯氣のように進み、その姿はまるで麒麟のようじゃった

「臼井とやら、のるがええ」

「単騎で攻め込む気か」

「なあに、わしに任せい」

侍は恐る恐る名無しの狼に跨った。名無しの狼は一声嘶くと、一気に走り出した

山を越え川を越え、村々を飛び越えて名無しの狼は走った

馬州に入ると侍がようけ屯しとった。名無しの狼は侍共をけちらし、飛び越え、撥ね除けながら一挙に本城にせまった

本城の前では沢山の軍勢が槍を持ち弓を構えておった

「いくら物の怪とはいえ単騎で乗り込むとは無謀よのう」

下山家の侍大将が大音声で迎えた

名無しの狼は四肢を踏ん張り頸を低く下げ、軍勢を睨み、にやりと嗤った。口元から妖氣があふれ出した

「毒気だ、口を押さえよ」

混乱の間について、名無しの狼は侍大将に一気に近寄った

「人間のくせに大口たたきおって、その口閉じれんようにしてやるぞ」

名無しの狼は後ろ脚で立ち上がり、前脚の蹄を呆氣にとられる侍大将の顔に叩き込んだ

侍大将の顔が蹄の形に凹み、耳から血と脳漿が吹き出した

逃げ惑う兵隊に名無しの狼は襲いかかった。侍の頭を叩き、腹を蹴り、

踏みつぶしていった

突き出される槍を軽々とかわし、飛び来る矢を跨ぎ、兵隊を倒していった

掘りを軽々と飛び越え、城中に飛び込み女子供も容赦なく踏みつけていった

名無しの貉は殺戮に酔いしれていた

「もつとかかつてこい、もつとかかつてこい。わしを殺れるものなら殺ってみい」

いつしか背中 of 侍が振り落とされたのにも気付かんかった

「わははは、わははは、わははは」

城中深く入り込み、遂に最後の部屋に辿り着いた。部屋の中には男が一人おった

「ぬしが殿さんかい」

「おのれ物の怪の力まで借りるとは卑怯千万」

「騙し討ちするようなもんに言われる筋合いはないわい。ぬしも同じ穴の貉じゃ」

名無しの貉は男に体当たりした。男ははじき飛ばされ壁にぶつかり赤い人型を残して崩れ落ちた

さてと、何じゃったかのう、一息ついた名無しの貉は考えた

「そうじゃ、姫じゃ。ころっと忘れとった」

名無しの貉は城の地獄の底に降りていった。牢があつた。木檻を易々と壊し、名無しの貉は奥に進んだ

年の頃十四五歳の娘が居った。娘は名無しの貉を目にとめると

「ひっ、化け物」

と言つて気を失つた

「化けもんとは失礼な娘じゃ。これが姫さんかのう」

最後の木檻を壊し、名無しの貉は姫を抱きかかえようとした

「しもうた、この手じゃかかえられん」

名無しの貉はみるみる小さくなり、人型になった。その顔は背中に乗せた侍と同じじゃった

姫を抱きかかえ、名無しの貉は表に出た。城は火に包まれていた。歩く先々に兵隊の骸が転がっていた。名無しの貉は大声で叫んだ

「臼井ーっ、臼井はどこじゃ」

名無しの貉は叫びながら侍を捜した

「臼井ーっ、返事をせい、臼井っ。こん娘が姫さんかどうか確かめてくれーい」

臼井の骸は大手門の内側にあった

名無しの貉は姫をそつと降ろし、臼井の骸を確かめた。胸に槍疵。一突きで絶命したようじゃ

小さな呻きを上げて、姫が気付いた。姫は名無しの貉を認めると、こう言った

「臼井？これはどうしたことです。あの化け物はいった」

「化け物はわしじゃ。本物の臼井とやらは、そこに転がってる」

姫は臼井の骸までよろよろと歩き、跪いた

「嗚呼、臼井。私を助けようとしてくれたのですね」

そう言って姫は手を会わせた

「して、化け物とやら、そなたは何者です。臼井の仲間ですか」

姫は正面から名無しの貉を見つめた

「ま、かくしとつてもしやーないな」

そういうと名無しの貉はしゅるしゅると小さくなり、元の貉の姿となった

「貉……さん？」

「なんじゃ、わしを知つとるんか、わしはあんたなんか知らん」

「わかりませんか、あたしです。貉さんに拾ってもらったあたしです」

「ほお、これは驚きじゃ。今度は侍の子に産まれたか」

「はい。あたしもまさか殿様の子供になるとは思っても見ませんでした」

た

名無しの猪は驚くやら呆れるやら

「今度の親はどうじゃ。甘えられたか」

「大層大事に育てられました。でも殿様の子です。そうそう親に甘えることはできませんでした。ましてやこのような時代です。いかに見苦しくなく死ぬかを教えられて生きてきました」

「せか。人間の世界はけつたいじゃのう。して、これからどがいする」
「城に戻りたいと思います。馴染みのない親ですが、親は親です。侍の子として親に孝行したいと思います」

「立派なもんじゃの。よっしゃ。乗りかかった舟や。一肌脱いだろ」
そう言うとな名無しの猪は見る見る大きくなり、麒麟にもどつた

「さあ、乗れい。城まで送っちゃる」

名無しの猪は走つた。じゃが、すぐ走るのを止めた侍の子とはいえ女子、早馬には耐えられんかった

「まあ、あわてたつてしやーない」

名無しの猪は妖気を出すのを止め、麒麟は馬になつた

ぽこぽこ馬はあるき、山を越え、川を渡つて馬州から出た

また、何日かかけ、山を越え、川を渡り、村を過ぎてようやく鹿州にたどりついた

「さあて、お城とやらはどこかいのう」

何日もの馬旅で、姫はすっかりまいってしもつた。ようように名無しの猪の背にしがみついたりするだけじゃつた

日暮れ頃、村の離れの井戸で鍬を洗うとる男が見えた

「すまんがのう、ちくと物を訪ねたい」

「なんですかいのう」

男は振り返ると、目の前に馬の顔があつた

「お城へ行くにはどういつたらええかのう」

名無しの狸が言い終わる前に、男は腰を抜き、口から泡を吹いて白目で倒れよった

「なんじゃい、肝の細いやつちやのう。馬が喋ったくらいで腰抜かすやつがあるかい」

名無しの狸はしゆるしゆると小さくなり、臼井になった

「姫さんもつかれたじゃる。ここらで水車小屋でん見つけて休もうか」
名無しの貉は小川沿いに水車小屋を見つけ、姫と入り休んだ

次の日の朝、名無しの貉と姫はあたりのただならぬ気配で目を覚ました

入り口を開けようとすると外から無理矢理に開かれて、侍の集団がなだれ込んできた

なすすべもなく名無しの貉と姫は縛り上げられ、引き立てられた

「乱暴な連中じゃのお、自分とこの姫さんがわからんのか」

「黙れ、物の怪」

そういうことかい、名無しの貉は察した。まあええわい、これで城を探す手間が省けると名無しの貉は思った。こんな縄、いつでん外せるわい

「だいじょうぶかい、姫さんよう」

「はい、なんとか。いずれわかってくれと思います」

名無しの貉と姫は城のある町に流れる川の河原に連れられた。河原から城が見えた

まわりをぐるりと侍たちがとりかこんだ。名無しの貉と姫の前に離れて床几が置かれた

名無しの貉が、さてこの先どがいしよつかのうと考えていると、本物の馬に跨った侍がやってきた。姫が小声でこつ言った

「貉さん。父です」

「ほうかい、あれが、殿さんかい。ほいじゃ見たら判るじゃろうつから、すぐ解いてくれるのう」

馬から下りた殿様は床几に座った。脇を槍を携えた小姓が固めた
「ほう、よく臼井に化けたな、物の怪よ。そちらの企みはなんじゃ」

「企みなんぞないわい。ぬしの娘をとどけに来ただけじゃ」

「そちが臼井に化けたよう、物の怪が我が娘に化けたのではないという
保証はなかるう」

「親なら一目見りゃわかるうが」

殿様はすつくと立ち上がり、こつこつ言った

「たわけがっ。我が娘は出城にて立派に自害したと報告を受けておるわ。
大方下山から頼まれて誑かしに来たのであろうが、そつはいかぬわ。全
てお見通しだっ」

「なっ」

「者共、射よっ」

殿様は軍扇をさつと名無しの貉に向けた

ひゅんひゅんひゅん

矢が名無しの貉めがけて飛んだ

「ふん、そがいなもんが、わしに・・・」

名無しの貉が念を飛び来る矢にかけようとしたその刹那、黒い影が名
無しの貉の前に飛び出し、そのままどつと倒れた

縄にくくられたままの姫の身体に矢が刺さり、血が噴き出した

「姫さんっ」

名無しの貉はおのが縄と姫の縄を念で吹き飛ばし、姫に駆け寄つて抱
き上げた。無数の矢は名無しの貉と姫の前で力無く落ち、砕け散り、ま
たあらぬ方へ飛び去った

「姫さん、しっかりせい。急所はずれちよる。死ぬような怪我じゃな
か」

「ええい、者共、射よっ、射殺してしまええ」

名無しの貉の手の中で姫はうつすらと目をあけ、白い顔がほころんだ。
そして目を閉じた

名無しの貉は全身の毛が逆立つのを感じた。その姿形は人だがもはや臼

井ではなく、顔は貉そのもので毛むくじやらであった

「とうとう正体を顕しおつたな、物の怪め。世が直々に成敗してくれるわ」

殿様は腰の刀を抜いた。名無しの貉は殿様を見据えた。名無しの貉の目が赤々と光り、

「はうっ」

のかけ声と共に名無しの貉の口から妖気が四方に飛び散った。侍たちの動きが止まった

あるものは弓を引き絞つたまま、あるものは次の矢を手にとつたまま、小姓は槍を名無しの貉の方に向けたまま、そして殿様は刀を抜いて、八相に構えようとしたその姿のまま

「おまえら人でなしじゃ、我が娘を平気で殺す人でなしじゃ。たとえ娘でのうても、姿形が変わらんもんをよう殺そうとできるのう。ちよつと前までかわいがつとつた子供やないか、慕つとつた姫さんやないか。よう覚えとけよお、孫子の代まで安穩と暮らせると思つなよお、この貉様がなあ、末代まで崇つてやるからな」

名無しの貉は吼えた。名無しの貉の怒りは静まらなかった

名無しの貉は姫を抱いたまま殿様の方につかつかと歩み寄つた。侍どもは、動かぬ身体で目だけで名無しの貉を追つた

「よう、殿さんよ。よつ見いな。これが物の怪に見えるんかい。ああ？」

殿様の目は恐怖で引きつった

「おんしだけは、殺られる身を味わつてもらおうかのう」

名無しの貉は姫を抱き変えると、殿様の振り上げかかった刀をとつた。「ええ刀じゃのう。殿さんともなると、持ちもんもええのう。どんだけ切れ味がええか、わしが試しちゃろう」

名無しの貉は無造作に刀を殿様の腹に刺した。刀は殿様の身体を突き抜いた

「切れ味も申し分ないのう、のう、殿さんよ」
名無しの貉は刀を捻ると上へ、心の臓へ刀を動かした。殿様の目は目玉よりも大きく開かれた

名無しの貉が刀の柄から手を離すと、刀はすつと消えた。刀は殿様の手握られ、上を向こうとしたままじゃった。名無しの貉は殿様に嗤いかけた

「どうや、殺られる気分は。ほんまに殺ってもええが、姫さん悲しむけんのう」

そして、名無しの貉は俯き、悲しげにつぶやいた
「おまえら、畜生以下じゃ。妖怪以下じゃ」

名無しの貉はくるりとまわり、侍どもを後にした
「さあ、姫さん。帰ろう。わしらの巣に帰ろう」

侍どもが束縛から放たれ、その場にへたりこんだのは、殿様の小便もとうに乾き、日も暮れかかるころじゃった。物の怪共が蠢き出す時分じやった

巣に戻る途中、姫さんを気遣って少しでも休めるよう名無しの貉はいくどか百姓屋の入り口を叩いた。しかし、百姓屋の入り口は固く閉ざされたままじゃった

「侍だけやのう、おえらもか。同じ人間じゃろ、何度も死んだ娘にちいたあ憐憫を感じんのか」

名無しの貉は吐き捨てたが、百姓屋が開かれることはなかった

ようようの態で名無しの貉は巣に戻った。姫は弱々しくも息はしとつた

名無しの貉は何日も何晩も姫を看病した。傷口に滅多に手に入らぬ薬草を惜しげもなく塗った。滋養の汁を口に含ませた。姫は目覚めることなく、命の火はだんだんにか細うなっていた

「もおええ、もおええ」

名無しの貉は目覚めぬ姫に語りかけた

「ぬしは人の何倍も人の悲しみを味おうた。人の何倍もこの世の儂さを味おうた。もおええ、人間の世界に帰えらんでええ。わしと一緒にここで暮らそう。わしがずっとずっと優しくしちやるけん。やから、もおええ。人にならんでええ。のお」

姫は死んだ

姫の思念は霧が晴れるように薄くなり散っていった

「消えた」

白い顔は美しかった

名無しの貉は穴を掘って姫を入れ、土まんじゅうをつくった

その晩、灰色狐が酒をもって訪ねてきた

名無しの貉は黙って飲んだ。灰色狐は黙って飲んだ

それからまた季節は繰り返し、名無しの貉は人を襲い、人を化かし、人を困らせて暮らした

今でも人を襲い、人を化かし、人を困らせて暮らしとるそつじや

どつとはらえ

初出 01FEB2007-07FEB2007 前世物語スレ